

「へき地から光を」

宮崎県教育庁義務教育課
義務教育・学力向上第一担当
指導主事 宮本 朝美

去る10月26・27日に、第69回九州地区へき地・小規模校教育研究大会熊本大会がハイブリッド形式で開催され、両日とも200名を超える参加者がありました。

本大会は、スローガンを「発信！火の国くまもとから はぐくもう！ふるさとの誇りを 育てよう！未来の創り手を」～へき地・小規模校の「強み」を生かした教育活動の創造～とし、初日には、全体会後に6つの課題別分散会において2校ずつの研究発表が行われ、二日目には、熊本県内6校において、授業公開及び授業研究会が行われました。

私は、初日、第4分散会に参加し、本県の日南市立大堂津小学校と、熊本県の天草市立天草小学校の研究発表を拝聴しました。大堂津小学校では、3年生以上に専科指導を取り入れることと合わせて、合同で行う授業も検討することで、複式指導の解消を実現されていました。また、体験学習の充実と各教科の学習効果を高めることを目指して、体験学習と教科の学びを関連付けた教育課程の工夫を実施されていました。一方、天草小学校では、学習リーダーの育成に力を注ぐことで、発達の段階に応じながら教師の「指導言」を減らし、児童が主体的に学習を進めていく学習スタイルを確立し、実践されていました。また、各学年で整理された体験学習を、学校行事・総合的な学習の時間・教科のいずれかに位置付け、児童に身に付けさせたい資質・能力や目的を明確にするという教育課程編成上の工夫もなされていました。

二日目、南小国町立りんどうヶ丘小学校を訪問し、5・6年生複式の国語の授業を参観しました。この授業では、各学年の学習リーダーが役割を自覚し、前時までの学習の流れに沿ってそれぞれの課題の解決に向かう学習を進めていました。60名を超える参観者に囲まれながらも、授業後には、6年生の代表児童から「いつも通りの姿を見せることができました」との振り返りの言葉がありました。小規模校だからこそ、学習リーダーの経験を積み重ねることができ、その結果、子どもたちに、どのような状況でも学びに向かう意欲と集中力が身に付いているのだと感じた瞬間でした。



【児童から参観者へのメッセージ】

さて、県教育委員会では本年6月に「未来を切り拓く 心豊かでたくましい 宮崎の人づくり」をスローガンにした宮崎県教育振興基本計画を策定いたしました。その計画において、「教育効果を高める体制や環境の整備・充実」という基本目標のもと、魅力ある多様な教育環境の振興・支援を施策の一つとして位置付け、へき地・小規模校ならではの「よさ」を生かした教育活動や、少人数学級や小学校高学年における一部教科担任制の実施などを通して、きめ細かで専門的な指導のできる教育環境の充実を図ることを目指しております。その取組の一つとして、平成23年度に本県で作成した「複式学級を有する学校のために～複式学級指導資料～」を、学習指導要領の趣旨に沿って令和3年度に一部改訂し、教育課程の編成や指導方法の工夫・改善及び指導の実践例などを掲載しております。また、複式学級の指導において効果的な活用が期待されるICTの活用についても追記しました。この資料を、各学校に配付するとともに、県教育研修センターで実施している、複式学級初担任を対象とした研修でも活用することで、本資料の周知及び複式学級を初めて担当する先生方の不安の解消や資質の向上を図っているところです。

中央教育審議会答申（令和3年）では、今後の教育課程の在り方について、多様な子供たちを誰一人取り残すことなく育成する「個別最適な学び」と、子どもたちの多様な個性を最大限に生かす「協働的な学び」の一体的な充実が重要とされています。へき地・小規模校では、これまで、少人数であることのよさを生かして、教師が児童一人一人の特性や学習進度、学習到達度等に応じて指導を行ったり、児童が学年の枠を越えて主体的・創造的に学び合ったりする教育実践が行われてきました。また、少人数であることによる課題を解決するために遠隔で他校との合同授業を行うなどICTの活用も進められています。まさに、へき地・小規模校における教育は、今求められている「個別最適な学び」と「協働的な学び」の先駆けと言えるのではないのでしょうか。「へき地から光を」の時代であると言われていた今、へき地・小規模校教育の益々の発展・充実に向けて、今後も、県教育委員会では学校や市町村教育委員会と目指す方向を同じくし、未来の創り手である子どもの育成に努めてまいります。